

その點に多く教えられる所がある。著者は前述のドックに對する
 獻呈論文に於て、Kerygma, Eschatology and Social Ethics
 と題する論文を書いているが、この表題に示された三つのことを
 融合しようというのがねらいのようである。プロテスタント教は
 宗教改革の時からパウロ的であつたが、それにヨハネの神秘主義
 内面性、單純性を加えねばならぬと説いている。

W. Bauer,

A Greek-English Lexicon of the New

Testament and other Early Christian

Literature, Eng. Tr. by W. F. Arndt and

F. W. Gingrich.

The Univ. of Chicago Press, 1952, \$14.00

この新約ギリシヤ語辭典の英訳は一九四七年にミズリ・ルーテ
 ル教會の會議で計畫され、前記の二人の學者によつて譯され、一
 九五五年の一月に原稿が完成したということである。一九五二年
 の第四版によつておるが、それを逐字的に譯したのではなく、
 少し取捨したようであるが、新しい序文の英譯もあり、また著者
 や譯者による最近の研究の結果をとり入れていて便利である。こ
 の有名な辭典が英譯されたことは非常に喜ばしいことである。原
 書の第五版の分冊は今年出はじめている。(以上四書、高橋)。

新刊紹介

Dietrich Bonhoeffer :

Ethik,

1949, Zweite Auflage, 1953.

ボンホエファーの名を心に深く留める様になつたのは終戦後間
 もない昭和二十三年冬の神學部の祈禱會で今は亡き小田實教授が
 當時出版された Nachfolge の英譯 (The Cost of Discipleship,
 S. C. M. Press, 1948) を通してこの若き殉教の神學者の姿を語
 られたとき以來である。薄暗い冬の日であり、暖房も充分でな
 かつたチャペルであつたが、却つてそれが小田教授の物靜かな口調
 と共にボンホエファーの生き抜いた生の厳しさを表わしており、
 聴く私共に深い感銘を與えたことを記憶している。

本書は彼が世に問うべく組織的に書いた倫理學の書ではなく、
 基督教倫理についての彼の散在している幾つかの論稿を彼の死後
 に集め一つの論文集として編纂したものである。或るものは獄中
 で書かれ或るものは爆弾をさけて地下に埋められたものであつた
 り、何れも弾壓と戦乱の中に緊張をもつて綴られた生々しい文章
 である。従つて或る部分は未完であり、又或る點は断片的である
 限定は免れ得ない。

ボンホエファーが倫理學の研究に意を向けたのは一九三七年に
 先述の Nachfolge を出版してからのことで、彼の獄中の書簡を
 みても度々この事に觸れていることから「倫理學」の完成を畢
 生の業と彼は念じていたことが察せられる。

現代神學に於て倫理に強い關心が寄せられてゐることは周知の事實であるが、その際に基督教倫理の基礎を見出すかが最も重大な問題となつて来る。ボンホエファーは受肉せるキリスト・イエスにその倫理學の基礎を見出してゐる。彼は基督教倫理を「形成としての倫理」『Ethik als Gestaltung』と呼ぶ。それは人本主義的な人格完成への道ではなく、又誠命的な抽象性をもつたものでなく、全く逆に、神が具體的な世に於てリアルな人となつたことに據つてゐる。ここで云う「形成」とは聖化の働きによつてキリストの如くなるという上昇の努力を意圖するものでなく、反對に人に對する愛から神が人となり給うたことに起因してゐる。キリストは肉をもち、人格をもち、人のとが、と苦惱とを持つリアルな人間『der wirkliche Mensch』となり給うた。

「キリストは高貴なる人間の變容ではない。彼はリアルな人間に對する神の『然り』を示してゐる。それは審判者の冷淡な『然り』ではなく苦しみを共に負う愛にみちた『然り』である。」(S. 17)

この故にイエスは一人の特殊な人間(ein Mensch)ではなく、根源的人間(das Mensch)である。人間が人間の力に依つて人間性の彼方へと成長しようとむなしの努力を續けるときに、神は己を低くして自ら人となり給うた。神はこのことを通してわれわれも眞の人となることを望んでおられる。この様にキリスト・イエスにある神の啓示にボンホエファーは倫理學の出發點を見出してゐる。倫理學とは何が善であるかを絶えず問う學問である。ボンホエ

ファーはそれを人間の空しい努力や社會的プログラムに見出すのではなく、人となるイエス・キリストの中に見出すのである。人としての形をとれるイエス・キリストの中に彼の形成としての倫理の出發點が存してゐる。之はアケムピス等の云う、キリストのまねび『Imitatio Christi』という上昇的な努力とは異なる。神が聖なる人の姿を指さしてゐる故に、人が人間とは異なる形、神の形に化せられるというのではない。全く逆に、神が人となり給うたが故に、人は眞の人間となるのである。ボンホエファーは「それ故に人間が自らの力によつて自己の形の變化を形成するのではなく、自ら人の形をとり給うた神が人を新らしく形成し給うのである。それによつて人が神となるのではなく、神の眼に於ける眞の人間となるのである。」(S. 25)と言つてゐる。ここに云う形成とは人間の「聖なる人間」への形成ではなく神の「リアルな人間」への形成を意味しており、それによつて人が眞の人間存在即ち「新しき人」となることを意味してゐる。

斯くの如く何が善であるかという倫理學の質問は啓示に於て答を見出されるとき、ボンホエファーにとつて基督教倫理の問題は「キリストにあつて啓示された神の眞實性を被造物の間にリアルなものとする」(S. 57)ことにある。

善がキリストに於てあらわされリアルなものとなつたことを彼は説き、あらゆる二元論的な見解に反對をなしてゐる。倫理學の中に通常存在する『Sollen』と『Sein』の對立、理論と實踐の相克は基督教倫理に於ては眞實性『Wirklichkeit』と眞實化『Wir-

Klichewerdens)の關係に於て捉えられ、兩者はキリストの啓示に於て成就していると考ふる。それ故に「善についての問題は、キリストに於て顯れた神の眞實性に參與することを意味する」(S. 57)と述べてゐる。

彼にとつては、世を取り去つてキリストを求めんとした中世の修道院の生活も、キリストを除いて世に接した一九世紀のプロテスタンティズムも共に眞の啓示の理解に至つていないものとして排撃される。彼は言う「二つの眞實性が存しているのではない。ただ一つの眞實性があるのみである。即ち現實の世界の只中に於てキリストにあつて成就されるに至つた神の眞實性があるのみである。キリストに與ることによつて同時に我々は神の世界の眞實性の上に立つのである。」(S. 63)この世から內的に又外的に遁れようとする努力は何れもこの世に來りし神の眞實性に悖るものであり且つ通世的態度は遅かれ早かれこの世への從屬を結果に於ては代償として拂うものであることを指摘している。

この點に於て彼がラインホルド・ニーバーの初期の著書の *Moral Man and Immoral Society* という問題設定は、個人と社會を對立させ、兩者を抽象化するものとして、之は「個人主義の時代に社會學的起源をもつ」考え方であるとして批判しているのは頗る興味深い(S. 58)。弟リチャード・ニーバーがエール神學校の講義で同様の見解を述べたことを覺えている。ラインホルド・ニーバーが右の見解を今日持ち續けていないことは明らかであるが、ボンホフエファーがユニオンで學んでいた頃のニーバーの

新刊紹介

立場に對する批判として見るときに了解されると思う。

斯くの如く、對立の中にあつた神と世界が受肉せるキリストに於て和解されたことによつて、基督者は「全くキリストに屬することにより同時にこの世に積極的に立つ」(S. 65)に至る。それ故この世はそれを意識するとせぬとに拘らず、キリストと關係をもつている。この關聯性を具體的にあらわしているものが、ボンホフエファーの「神の委託」(Mandate)の概念である。彼によると之は四つの領域を含んでいる。即ち勞働、結婚、政治と教會である。彼はそれを秩序と言わずに「神の委託」と云うのは、神がわれわれに託せられた使命をよりよくあらわしているからであると言ふ。プルンナーが用いている様に「秩序」と言ふと固定化された靜的な印象を與えるのに反して「委託」は動的な表現をもつと思ふ。これらの「委託」は夫々の道を通してキリストに仕えるべく意圖されている。これらの四つの「委託」がすべての人々に與えられており、基督者の全生活はこれらの四つの「委託」の下にあると考へられている。最初の三つが世俗的なものであり、後の一つが精神的なものであると分けて考へることは許されない。これらすべてはその起源とその究極的なキリストとの關係に於て聖なるものであるとみなされている。例えば「勞働それ自體が神聖なものではない。それがキリストの爲になされるとき、神の使命と目的に仕えるときに神聖なものとなる」(S. 71)と彼は主張する。ここに於て「形成としての倫理」は「應答としての倫理」の性格を強くして來る。ここで強調されることは、神の委託に從ふこと、

即ち神の召しに應答することである。(S. 71) 彼にとって「委託」のなされている場合は神の召しに對する應答の場合(«Der Ort der Verantwortung» (S. 197) として理解されている)。

ここに人本主義的な人間形成でなく、キリストが人となることによつて人間がはじめて眞の人間と立ち歸ることに眞の人間形成を見出し、聖書に基づく四つの具體的委託を通して、神に仕え、その召しに應答して行くという態度に彼の倫理のモチーフがあると思ふ。

ここで問題になることの一つは、この世に於ける人間の生の領域は果して右の四つの委託によつて餘すところなく含まれているであろうかということである。ここに「委託」の領域についての問題がある。例えば結婚を取り上げる場合、獨身者の問題が残されるであろうし、労働と云う場合、文化一般の問題や經濟政策の問題等が如何に扱われるべきかが問題となつて来るであろう。

ボンホエファアの倫理學の特色は上述の如く基督中心の形であるが、それは同時に教會中心的な性格をもっている。教會はキリストの體であり「肉となりし、イエス・キリストの身體の形を具體的にあらわしているのが教會である。」(S. 26) 教會は單なる宗教的集團ではなく、人々の中に形をとり給うたキリスト自身の姿をあらわしている。ここに彼の基督教倫理はキリストの體である教會を中心としている理由がある。その觀點からやや断片的であるが後半に教會と國家の關係を彼が論じているが、國家に對する教會の責任の理解が表明されており、著書自らが國家の壓迫と闘い

つづ筆を進めた背景からも力強い部分となつてゐる(S. 259—S. 275)。彼がナチスとの闘争にあつて、飽くまでもこの世から遁れず又妥協せず、教會を中心に強く證しをなし続け、その死に至るまで眞摯な態度を貫き得たのも、かかる「形成としての倫理」に根ざされてゐた所以であることを思ふのである。尚ナチスとの闘争中のボンホエファアの記録が「抵抗と服従」という題で E. ベテールが教授により編纂されている(Dietrich Bonhoeffer, *Widerstand und Ergebung, Briefe und Aufzeichnungen aus der Haft*, 1955, S. 304) 之は獄中の手紙、日記、手記を集めたもので、そきに倉松功氏によつて譯出された「たとい我死の谷の蔭を歩むとも」はその獄中書簡の部分の抄譯であり、ボンホエファアの生涯を理解するに參考となるものと思ふ。

Waldo Beach and H. Richard Niebuhr (ed.),

Christians Ethics,

Sources of the Living Tradition, The

Ronald Press Company, 1955.

本書はエール大學のリチャード・ニーバー及びドリュー神學校のウォールド・ビーチの兩教授が聖書より今世紀に至る主な基督教倫理の資料を編纂したものである。その序文で編者は、「基督者であることは何を意味するかという課題に對する眞摯な探索者の答を基督教の歴史から集めんと努力したものがこの書である」

(p. 3)と語っている。本書は神學校で學者にとつても又教會に傳道に當る牧師にとつても參考となる資料を多く提出してくれらるゝことと思ふ。編者は「基督教倫理の根本的な問題は代々の偉大な基督教者の倫理についての著作を通して最も明確に提示され得る」(iii)という信念に基いて基督教倫理の歴史的資料を集め、出所を明確にし、各々の先覺者についての適切な紹介を加えている。聖書の倫理に出發し歴史的に代表的基督教思想家や運動として次の様なものが含まれている。The Apostolic Fathers, Clement of Alexandria, Augustine, Monasticism (St. Benedict and St. Francis), Mysticism (Bernard of Clairvaux and Meister

Eckhart), Aquinas, Luther, Calvin, Puritanism and Quakerism, (Richard Baxter and Robert Berclay), Butler, Wesley, Edwards, Kierkegaard, Rauschenbusch.

最後の章は現代の基督教倫理の傾向が紹介されている。各章の後に原資料の文献と参考文献を擧げているが更らに研究する者にとつて參考となる。人物の選出、資料の選擇ともに當を得ており基督教倫理學の歴史を學ぶものにとつて好い伴侶となると思ふ。ただ平素よりリチャード・ニーバーの高く評價しているモウリス(F. D. Maurice)の著作が含まれていないことは聊か寂しさを感ずる。

(以上二書竹中)